

○高梨 安弘・佐藤美枝子・宇都宮 道・
東館 紀子・和田 順子・黒島 淳子・
吉田 茂子

中胚葉性混合腫瘍は、子宮体部、頸部、膣、外陰部などに発生し、間葉性腫瘍成分と上皮性腫瘍成分とが併存するまれな疾患である。今回私達は子宮原発性中胚葉性混合腫瘍の1例を経験したので報告する。

患者は32歳の未妊婦、主訴は下腹部腫瘍、下腹部膨満感、便秘で、既往歴は特記すべきことはない、初潮14歳、周期順調、30日型、持続7日間、最経月経昭和58年7月2日～8日間、家族歴は父親に糖尿病、高血圧が認められる。

昭和58年8月16日、下腹部腫瘍感にて当科受診、巨大腹部腫瘍と診断される。8月30日腹痛、性器出血、重症便秘、無尿にて緊急入院。

入院時所見は恥骨上部より臍高に至る硬い腫瘤を触知した。検査成績では白血球増加、BUN上昇、血沈亢進。胸部X-Pでは両側横隔膜挙上。腹部X-Pでは骨盤腔より下腹部までの腫瘤陰影、腹水貯留。B scopeでは多房性の腫瘤、右水腎症、腹水が認められた。

開腹時所見では多量の血性腹水を認め、腫瘤は大網、腹膜、腸管と癒着が強く一塊となり、骨盤腔内の浸潤も強度であった。子宮は前傾前屈、手拳大で両側卵巣卵管は強度の癒着、浸潤で不明。そのため子宮腔上部切斷術、大網部分切除術施行した。子宮は225g、その他腫瘍塊は2,200gで、タッチスマアーではN/C比上昇、核小体の増大、増多、mitosisを認め、組織学的所見ではmalignant mixed mesodermal tumorで腺癌、肉腫様部分、osteoid形成がみられた。術後経過では高熱、無尿が持続、術後5日目死亡した。

本疾患の予後はきわめて不良で、5年後生存率はI期とそれ以外とでは大きく異なる。本症例はIV期で急激な経過をたどり死亡した1例であり、文献的考察を加え報告する。

5. 一側肺全摘時の血行動態の変動および肺動脈一上大静脈間シャント形成の効果に関する実験的研究 (外科)

○小野田万丈・高橋 敏・鈴木 忠・
倉光 秀麿・織畑 秀夫

緒言：原発性肺癌や転移性肺癌に対する手術適応の拡大と術式の高度化に伴い肺切除術が広く行なわれるようになってきた。一側肺の全摘を行なうことによる肺実質の減少、肺予備血液減少による循環調節機能の障害、残存肺の相対的血流量の増加などにより、肺動

脈圧の上昇が見られ、呼吸機能障害に伴って、遠隔期には循環動態の変動による右心不全を併発してくると思われている。そこで演者は片肺犬を作成し、術直後の肺動脈圧の急速な上昇に対して、肺動脈一上大静脈間にシャントを形成し、血行動態および血液ガス分析を中心に検討したところ、肺動脈圧上昇に対する予防的効果を認めたので報告する。

実験：一側肺全摘を行なった雑種成犬6頭を対照群とし、一側肺切除後肺動脈一上大静脈間にシャントを形成した8頭を実験群とした。両群において術後3時間にわたり血行動態の変動、血液ガス分析、肺動脈一上大静脈間シャント量を測定し比較検討した。

結果：一側肺摘後、肺動脈圧は両群とも約140%の上昇が見られ、対照群では下降傾向は見られず、実験群では漸次下降し、3時間後ほぼ全摘前の状態にもどった。シャント形成による動脈圧、中心静脈圧、左心房圧等は影響をうけなかった。血液ガス分析では、肺動脈血PO₂の低下、PCO₂の上昇が見られたが、大動脈、左心房血ではほとんど変化は見られなかった。これらの結果より、一側肺全摘後、肺動脈一上大静脈間シャントを形成することは、残存肺への血流量の減少をはかり、急速な肺動脈圧上昇の予防に効果があると結論を得た。

6. 乳癌術後の他臓器重複癌の4例 (外科)

○藤波 睦代・神尾 孝子・加藤 孝男・
西 純一・小林 重芳・鈴木 忠・
倉光 秀麿・織畑 秀夫

乳癌術後の他臓器重複癌については、乳癌の長期予後の改善及び追跡率の向上に伴い、近年報告例数が増加している。また一部では術後の抗癌療法の影響の可能性のある悪性腫瘍発生例の報告もある。今回、当科にて昭和42年1月より58年12月までの16年間の原発性乳癌手術症例533例を調査した結果、4例に他臓器重複癌(対側乳腺を除く)が認められたため報告する。発生率は0.75%に当る。この4例は、第1癌、第2癌とも病理像が確認されているが、この他2例に胃癌合併が疑われたものがある。しかし他施設にて加療後死亡し、組織学的裏付けが取れぬため、今回の報告より除外する。

症例1は53歳女で、Stage IIの乳癌術後放射線療法を施行し、3年10カ月後に胃癌を確認、症例2は63歳女でStage Iの術後やはり放射線療法を行ない、3年4カ月後に胃癌を確認、症例3は58歳女でStage IIの